

「現地を訪問して想うこと」

参加者氏名：山村 杏奈

卒業年 　　：2014年

卒業学部 　：法学部

参加コース：B 宮城県コース

今回のツアーで最も感じたことは“被災地はまだ大丈夫じゃない”ということである。現在、京都に住んでいる私は3年と7カ月も経ったのだから、以前と同じまでもいかないとしても少しは賑いのある被災地を想像していた。しかし、現実に観た光景は何もない荒れた更地がただ広がっているというものだ。以前の様子を知らない私からすると元々このような状態だとも思えるが、現地の人々からすると胸が詰まる思いのようであった。そのような状態でも、女川地区のように町が一致団結して前に進もうとしている地区もある。“女川は流されたのではない 新しい女川に生まれ変わるんだ 人々は負けずに待ち続ける 新しい女川に住む喜びを感じるために”という詩を小学6年生が書くように復興にむけて頑張っている。一方で名取市のようにまだ家族が見つからないのにそこを開拓することに抵抗を感じる人がおり、前に進むに進めないところもある。3年と7カ月を経ても癒えない傷が被災地を“もう大丈夫”とはいわせない。

現地の方のお話を聴き、私にできることは何かと考えた。それは語り継ぐこと。私は京都にいますので被災地で何かはできないけれど東日本大震災を忘れないように周りに伝えていきたい。特に津波に対する避難の仕方に対して防災教育が必要だとおっしゃっていたのを聴き、それは誰しにも当てはまることだと感じた。津波がよくおきる地域だからこそ、いつもみたいに大丈夫と考えたことが仇となり命を失った人がいる。それは津波がおきない京都にだっていえるのではないか。震度3程度の地震ならば、いつも通りで大丈夫と過ごしていないだろうか。もし東日本大震災のような地震が起きたら、そのような考えでは命をおとすかもしれない。阪神淡路大震災の時、私はたった2歳だった。あの時のことを私は憶えていない。このように年月が経てば東日本大震災も語り継がなければ忘れてしまい、また同じことを繰り返してしまう。そのようなことを繰り返さないために語り継ぐことが必要である。